

火

横光利一

青空文庫

初秋の夜で、雌めすのスイトが縁えんがわ側の敷居しきいの溝の中でゆるく触角を動かしていた。針仕事をしてる母の前で長火鉢ながひばちにもたれている子は頭をだんだんと垂れた。鉄壘てつびんの手に触れかかると半分眼を開けて急いで頭を上げた。

「もうお寝。」

母は縫目ぬいめをくけながら子を見てそういった。子は黙って眼を大きく開けると再び鉄壘てつびんの蓋ふたの取手を指で廻し始めた。母はまたいった。

「明日また遅れると先生に叱られるえ。」

子はやはり黙っていた。そして長らくして、

「眠ねむたいわア。」といった。

「そうやでお眠ねむりって言うのやないの。」

「いやや。」

「お可かしい子やな、早はようお眠ねむんかいな。」

子は立上つて母の肩の上へ負われるようにのしかかると、暫く静しばらはずかにしていたが、その中うちに両足で畳を蹴けり飛び上つた。母は前へ蹲かがむようにして「重たいがな、これ、針でつくえ。」肩の子を見向きながらいった。子は再び静しずかになつた。

「ええ、お母さん、眠たいわア。」

「そやでお眠たらええやないか、重たい重たい。」

子は「いやーや」というと母の肩からすべり下りて膝ひざの上へ顔を埋めた。

「あぶないがな、針が刺さっているやないか。」

母は膝の上の布切きれを前の方へ押しやった。子の頭の頂いただきから首条くびすじへかけて片手で撫な手下たもとろしながら低い声で、

「ほんとにもうお寝、え。」といった。

「お母さんも寝ないや。」

「人が笑うわ、九つもなつてくるくせに一人で寝んなんて。」そして母は些ちつと黙つていたが、「お前の頭はほんとうにええ格好や。」と呟つぶやいた。

母も子も黙つていた。隣家から酒気を含んだ高たか声こえが聞えて来た。子は夕暮前に、井戸いど傍そばで隣家の主人が鶏とりをつぶしていたのを眼に浮べた。

「お母さん、お隣りのはな、鶏を食べていやはるのや。」と子は母を見上げていった。
 「そんな事をいうものやない。」と母はいった。隣家の裏庭の重い障子しょうじの開く音がすると、縁側ところの処へ近所の兼助かねすけという男が赤い顔をして立っていた。

「お里さんさと、御馳走ごっそだすぜ、さアお出いでやす。」そう男がいつて子供を抱く時のように両手を出して一度振るとひよろひよろとした。

母は微笑わらつて「え、大きに。」といった。

「さア、早ようやなけりや駄目いけまへんぜ。」

「この子がいますで後ほどまたおよばれますわ。」と母はいった。

「何なにアに、米よねさんは一人寝せときやええさ、なア米さん、独人ひとり寝てるわのう。」と男は顔を少し突き出した。

子は男から顔をそむけて黙つて母の顔を見上げた。

「お前ひとり寝てる？」と母は訊きいた。

子は顔を横に振つた。

「あんなにいうておくれはるのやで、お前ひとり寝てな、え、直じきにお母さんが帰つて来るで。」

「好えさ好えさ、赤子じやあるまいし。」そういうと男は「どっこいしょ。」と背後へ
 振り返った。母は子の頭を膝から起して「待っておい。」といって笑いながら縁側の方へ
 立った。そして「下駄がないわ。」と呟いた。

「下駄のような物入るものか。」

と男はというと彼女の手首を掴まえて背を向けると両手で彼女の足を抱いて歩き出した。
 母は男の背の上で「険い険い。」と笑い声でいった。

子は縁側へ走り凭つて戸袋からのり出した。すると男の背上で両足をかかえられてい
 る母が隣家の庭の真中でひよろひよろしているのを見た。子は男が憎くてならなかった。
 そして母が非常に悪いことをしているような気がした。

「丁度好えぞ、兼さん。」

赤い顔をした隣家の主人がそういつて笑うと、傍の主婦は脱けた前歯を手で隠すように
 して淡笑いをした。

子は室へ入って障子の片端を胸に押しつけると、指を舐めてぷすぷすと幾つも障子に
 穴をあけた。もう眠たくなかった。

暫くして子は戸袋の処からまた隣家の庭をソツと覗いた。母が兼の横に坐つて銚子を

捧^さげるようにしているのが見えた。子はもう母が自分の方を向くだろうと思つてその方を長らく見ていた。母は銚子を持つたまま何か話している主人の顔を見続けていた。そして時々顎^{あご}を動かした。しかし何時^{いつ}までたつても子の方を向かなかつた。

子は悲しくなつた。で、顔を戸袋からひっこめて「お母さん。」と呼んだ。

「はいはい。」

そう母はいつた。ほど経^へて母が何かいつて帰つてくるらしいけはいがしたので子は火鉢^{ひばち}の傍へ走り込んだ。

母は眼の縁^{ふち}を少し赤くして帰つて来ると、

「まだ眠てやないの。」と微笑つていつた。子は黙つて母の手を引張つて叩^{たた}いた。

「さアもう寝な。また明日学校が遅れるえ。」

子は口を尖^とがらせて母の手の指を咬^かんだ。母は「痛ツ」といつて手を引っこめた、そして些^{ちよ}つと指頭^{ゆびさき}を眺^{のぞ}めてから「まアこの子つたら。」といつた。子は黙つて母を睥^{にら}んでいつた。そして、「お母さんの阿呆^{あほう}。」というと母の手を掴んでもう一度咬もうとした。母は子の背中を押すようにして「此処^{ここ}をかたづけたら直ぐ寝るでなお前は前^{まへ}へ寝てなえ、ほんとお前は賢^さいえ。」そういうと子を寢床の方へ連れて行つた。

二

その日は刺繡ししゅうの先生の市まちから村へ廻つて来るのが遅れていた。

米の母は、六年前にアメリカへ行つた良人おとこから病氣という報せしらせを受けとつて以来半年余り送金が絶えているにもかかわらず、まだ刺繡を習っているといふことについて、親戚側からとやかくいわれた。しかし彼女は、少々の金を費ついやしてもこれさえ覚えておけばまさかの時に役立つといつて習い続けた。

刺繡の先生は遠い市から月に一回欠かかさず村へ廻つて来た。米の村では母だけが刺繡を習つていた。これを習う最初にあたつて先ず、何処どこでも、その習う期間は先生を自分の家に宿泊させる約束をしなければならなかつた。米の家でもその約束を守つていた。初めのほどは、十五になつた米の姉と母とが習つていた。しかし、父から送金が絶えると共に母は娘を看護婦の見習生みならいせいとして市へやつて自分独り習い続けることにした。

米はその時から自分の家が非常に貧しくなつたのだと知つた。しかし、何処が前よりも貧しくなつたのかは分らなかつた。また、ただ、姉が彼と一緒にの家いないという事以外

に生活の様子は前とは少しも変っていないかった。

米は姉に逢あいたいと思つた。殊に二人が喧嘩けんかした時のことを想い出すと溜たまらなく逢いたくなつた。しかし彼は姉へ手紙を出す時、かばんと小刀こがたなとを歸りに買つて来てくれとは必ず忘れずにいつも書いたが、逢いたくてならぬとか、早く歸つてくれとかは決して書かなかつた。というのは、自分の愛情を現あらわすことを羞はづかしく思いもしたし、また、そのことを母に見られるのをきまり悪く思つたからでもあつた。

三

学校がっこうの門を出る時、米は白墨を拾つた。歸る途々みちみち、彼は何処か楽書らくがきをするに都合の好さよさそうな処をと捜しながら歩いた。土蔵どそうの墨壁は一番魅力を持つていた。けれども余り綺麗きれいな壁であるといいつすん寸ほどの線を引いて満足しておいた。

村端まで来て、道の片側に沿つて流れている小川にかかった御陰石みかげいしの橋を見た時、米は此処が最も楽書するのに適していると思つた。そして最初に滑なめからそうな処を撰えらんで本という字を懸命に書いてみた。草履ぞうりは拭物ふきものの代りをした。彼は短い白墨が磨すり減へつて来る

と上目をつかつて、暫く空を見ていてから

「カネサント、オカサントユウベ」

と書いた。彼はその次を書かなかつた。なぜかというとな昨夜眼を醒した時、真暗な自分の横で母と男とが低い声で話していたのはもしかしたなら夢であつたのかもしれないと思つたから。しかし、男の堅い手がそつと自分の手を強く圧えて直ぐひっこめたのは確に夢ではなかつたと思つた。そして、彼はそれ以外に何も記憶になかつた。

彼は立ち上つて石橋の上から去ろうとした、が、十歩ほど行くと後へ戻つて橋の上の字を草履で消した。そしてもう一度書いてみたけれどもやはり消した。後はぶらぶら歩き出すと急に走り出した。走り出ると反り返つて白墨を高く頭の上へ投げて踏み潰した。そしてまたぶらぶら五、六歩あるくと走り出した。

村へは入つた処で染物屋があつた。米はその雨垂落に溜っている美しい砂を見る^{しゃがこ}と蹲み込んでそれを両手で掬つてはばらばら落してみた。終いには両足を投げ出した。そして、大きな砂粒をかき去けると人差指でオカサンハ、と書いた。もう昨夜の事は夢だとは思えなかつた。急に母を擲りつけたくなつた。その時彼は砂の中に透明な桃色をしたゴマの砂粒を見付けた、彼はそれを手の平で拭いてよく眺めていると何か貴い石にちがいな

いと思つた。

「ダイヤモンド金剛石や!」

フと彼はそう思うとほんとうの金剛石のような気がした。するといよいよ金剛石だと思われた。彼はそれをすかして見てからもとあつた砂の上へ置いてみた。しかし、暫く見詰めていると外の砂と入り交つて分らなくなりそうになつたので直いでまた取り上げた。眼が些つと痛かつた。

彼はだんだん嬉しくなつて来た。小刀が買える、カバンが買える、とそう思つた。が、直ぐその後には姉のことを思い浮べると、小刀もカバンも飛び去つて、ただこの金剛石を持つているということばかりで姉が家へ歸つて来られるような気がして来た。もうじつとしていられなかつた。

そこへ米より三つ上の辰という子が歸つて来た。

「金剛石やぞ、これ。」

米は些つと砂粒を差し出すと直ぐ背後へ廻した。

「嘘いえ。」と辰はいつた。

米は金剛石を見せずにはいられなかつた。

辰はその砂粒を取ると暫く眺めていて

「こんな金剛石あるか。」

といった。そして、不意に半分手を差し出ししている米の傍から、駈け出した。米は、三、四間後を追いかけたが急に真蒼な顔をして走り止まると大声で泣いた。

辰は米を見返つて溝の中へ捨てる真似をして道傍の材木の上へ金剛石を乗せて、赤目を一度してそのまま帰った。

米は辰の姿が見えなくなると徐々材木の方へ歩いて行つた。金剛石は材木の浅い割目の中で二重に見えていた。彼はそれを掌の上へ乗せると笑えて来た。

家へ帰ると彼は中へは入らずに直ぐ裏へ廻つて、流し元の水を受ける槽を埋めた水溜の縁の湿っぽい土の中へ金剛石を浅くいけた。そこには葉蘭が沢山生えていたので、その一本の茎を中心に小さい円を描いておいた。彼は、こうしておけば直きに金剛石が大きくなるにちがいないと思われた。それに此処は水をやらなくてもいいと思つた。

その夕方、米は昨日見付けた柏かしわの根株ねかぶの蜂の巣を遂に叩き壊して帰って来た。そこへ母が奥から出て来て魚屋の通帳を彼に渡して牛肉の鐘かねづめ詰を買って来いと命じた。米は母の顔が少し赤いと思った。そして外へ出る時庭に見馴れない綺麗な下駄を一足見付けた。彼は畳のような下駄だと思って履はこうとすると、母は「これ。」と顎を引いた。

米の家と魚屋とは親戚であつたし、馴れていた。それでその魚屋の主人は米は障子を開ける前に、きつと叔父おじさんは常日いっものように笑っているだろうと思つて覗いて見たが、独人ひとりで恐い顔をして庭の同じ処を見詰めていた。米は今日は膝の上へ乗れないと思つたが、障子を開けると直ぐ叔父はニコニコした。

「鐘詰、牛肉のや今日は。」

米がそういうと叔父は笑いながら立つて鐘詰棚へ手を延ばして「どうしたのや、先生が来たんやな。」といった。

米は家の庭にあつた畳のような下駄は刺繍の先生のだなと思つた。「どうや知らん。」と答えた。

叔父は鐘詰の口を開けながら風呂ふろへ入れてやろうかといった。米は「やめや。」といった。すると叔父は突然、「どうや米、お前先生とお父とつつアんとどつちが好きや、うん。」

と訊きいた。

「知らんわい。」

米は仰あおむ向きになつた叔父の膝の上へ寝そべつてそういつた、そして叔父の鼻あなの孔なは何なぜ黒いのだろうと考えた。

「知らん、阿呆なこといえ、お父つアんはもう嫁むさん貫もろうてござるぞ、どうする、ん？」と叔父は覗のぞき込んだ。

米は腹を波形に動かして「ちがうわい、ちがうわい。」といつた。しかし叔父のいう事は真実のように思われて、もう父は歸つて来ないような気がして来た。母とさえ一緒にいる事が出来れば父の歸つて来る来ないはそう心にかからなかつた。すると、黙つて叔父の手の皮膚を摘つまみ上げあげていた彼は急に母が昨夜男と寝た事を自分が知っているのを氣使つて自分の留守に死んでいはずまいかと思われた。その中うちに涙が出て来た。で、草履あわを周章あわててはいて黙つて歸ろうとすると、叔父は「何んじや米。」といつた。けれど彼はやはり黙つて表へ出ると馳はけ出した。

家へ歸つた時母は罐詰かんじつを米から受け取つて「お前ままアこの間ま着返きえた着物きものやないか。」と睥にらんだ。彼の着物の胸から腹へかけて罐詰の汁が飛かすり白しろの白しろい部分を汚こしていた。

母が自分を見たなら抱いてくれるとばかり思っていた米は何ぞだか急に他家の母の傍に
 いるような気がした。そして、身体をあちこちに廻しながら物を踏み躪るような格好をし
 て母を見い見い外へ出て行こうとした。「通いは？」と母が訊いた。米は忘れて来たのを
 知ったが悲しくなつて来たので黙つて表へ出た。しかし、直ぐ金剛石のことを思い出すと
 裏へ廻つて行つて、夕闇の迫つた葉蘭の傍へ蹲つて、昼間描いておいた小さい円の上を
 指で些つと圧えてみた。すると、間もなく、姉が帰つて来て、家の者らがちりちりに生活
 しなくてもいいようになると思われた。しかし金剛石ではないと思うと金剛石ではないよ
 うな気がして淋しくなつた。

外が真暗になつてから家の中へ入つた。やはり来ていたのは刺繍の先生であつた。米
 のその夜の夕餉の様は常日とは変つていた。餉台は奥の間へ持つて行かれたし、母が
 先生の傍へつききりなので彼は台所の畳の上で独人あてがわれた冷やつこい方の御飯をよ
 そつて食べ始めた。初めの裡は牛肉を食べたかつたので、母が持つて来てくれるまでに御
 飯を食べてしまわないようと少しずつ遅くかかつて食べ出したが、何日の間にかお腹が膨
 れて来た。

彼が食べ終つた頃、母が奥から米の傍へ皿を取りに出て来た。

「お漬物は。」と米は訊ねた。

「うむ？ うむ。」と母はいった。

「お漬物何処、お母さん。」と少し米が大きな声を出すと母は「はいはい、今あげますよ。」といつて奥へ行つた。しかし幾ら待つても母は出て来なかつた。その中に米はもう漬物の事を忘れてしまつて箸のさきを濡らしては板の間へせさせと兵隊の画を描き初めた。どうしてこう幾度画いても帽子が小さくなるのだらうと苦しんだ。

奥から餉台や汚れた食器が台所へ歸つて来た。罐詰の牛肉はもう皿の上から消えていた。米は牛肉をどうしたかと母に訊ねたかつたが、そのことを奥の客に聞かれては羞しいと思つた。そして、間もなく母は再び客に奪われた。

米はあきらめて黙つて紙石盤を出して来ると腹這いになつて画をかき始めた。一頁に一つずつ先ず前の軍人から始めて二枚目に糞を落している馬を描いた。しかし、馬の尾を高く上げていいかどうかと迷わされた。そして、結局、細い勢の好い滝のような曲つた尾を付けて納得した。次には姉の顔を描いた。下頬の膨らんだ円い輪廓を幾度も画き直してから眼鼻をつけて最後に鼻柱の真中へ黒子を一つ打つた。そうして出来上つた南瓜のような顔の横へ「ネーサンノカオ」と書いておいた。その顔を眺めていると、姉の黒子

は黒いが画の方は白いと気が付いた。そして、それを黒くすると姉の顔に一層似つかわしくなるであろうと考えたけれどどうすれば黒くなるかという方法が分らなかったのものでそのままにしておいた。

九時が打つともう米は眠たくなった。奥から母の笑い声が聞えて来た。いつも奥で寝ている彼は、今夜は何処で寝て好いのか知らなかった。すると、また、昨夜眼を醒した時の母と男との囁きを思い出した。そして、学校の帰り道に石橋の上へ書いた楽書を消したかどうかと気がかりになって来た。それは消したようでもあるし消さないようにも思われた。

母が奥から出て来たとき、

「何処で寝るの。」

と米は訊いた。

「アそうそ、お前もう眠な。」

母はそういうと直ぐ奥へ引き返して行った。そして奥の間で「些つと失礼します。」と
 いて蒲団を米の横へ持つて出て来てから、楕円形の提灯ちようちんに火を照けた。蠟燭ろうそくは四寸すんほどもあつた。

「お前提灯持つて二階へお上り。」

と母はいった。子が階段を昇ると母はその後から蒲団を擁かかえて昇った。

母が蒲団を敷いている間、子は灯ひが消えないように提灯をさげている。「お母さんも寝な恐こわい。」と子はいった。

「直ぐ来るえ。直じつきや。」と母はいった。子はそれきり何ともいわなかった。母は梯子は子の中頃まで降りると「寝る時灯を消しな、え。」といった。子は「うん。」といった。灯のついたままの提灯を畳んで枕もとに置いてから、母について降りた。そして鉢さへ冷めた鉄てつ壇たんの湯をいっぱい注ついで、それを再び二階へ持つて来て枕元の提灯の傍へおいた。寝巻きを着返がえて蒲団の中へは入ると子は俯伏うつぶせになって、川の水でも飲むような格好で一口鉢さの湯を呑んだ。それから、母と自分との蒲団の領分きを定めようと思つて母の木枕きまくらを捜したが見あたらなかった。で、身体を蒲団の片方へよせてまた鉢さの湯を一口呑んだ。そして彼は額ひたいを枕にあてると母の笑い声が下から聞えて来た。何時いつ母は寝に来るのかしらと思つたが母の来るまで楽しみに一口ずつ長らくかかつて鉢さの湯を減ふらそうと心に決めた。湯は三口目に一分ぶほど減ふった。しかし四口目の頭は何時までたつても枕の上から上らなかつた。

その夜の一時過ぎに子は眼が醒めた。すると、寝巻を着た母が蒲団の上に坐つて彼をしつかりと抱いているのを知った。母の背後にはランプを持った刺繍の先生が黙つて立つていた。あたりに煙が籠こもつていた。そして、真黒に焼けて輪をはじけさせている提灯を中心に、枕元の畳の焦げた黒い部分が子の寝ていた枕の直ぐ傍で拡ひろがって来ていた。鉢は焼け残つた子の着物の上にひっくり返つていた。子は睨つぶりかけた眼で焦げた畳を眺めていた。そして首を些つと横に振ると、母の拡ひろがっている襟えりもとへ顔を擦すりつけるようにしてかすれた声で

「早よう眠よう。」

といつてまた眼を閉じた。母は黙つていた。その中うちに彼女の眼が潤うるんで来た。

「ランプはもう要いりませんか。」

と先生がいった。母はやはり黙つて少し前へ身体を動かした。

先生も黙つて下へ降りて行つた。室へやの中が暗くなると、母は子を一層強つよくだいた。そして長らくして、

「虫が報しらせたのやわ。」

と小さい声で呟いた。子はもういびきを立てていた。

青空文庫情報

底本：岩波文庫「日輪 春は馬車に乗って 他八篇」岩波書店

1981（昭和56）年8月17日第1刷

1997（平成9）年5月15日第23刷

入力：大野晋

校正：田尻幹二

1999年7月9日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

火

横光利一

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>